



寝床屋の落語出た帖・壺

試し読み

—— 酒と言えば、ちよつと前までは一気飲みなんぞが流行っておりましたが、古今を問わず、酒と言うのはちよつとしたレクリエーションとしても用いられていた様で…。こんな話もありました——

● 試し酒

ある日、小間物問屋井筒屋の隠居の元に、友人が遊びにきた。

その友人も大店の主人で、反物屋紀伊国屋を営んでおり、井筒屋とはたいそう仲が良かった。そして、紀伊国屋は最近雇い入れたという男を一人連れてきていた。

良い囲碁仲間でもある二人は、一局囲んだ後、井筒屋の酒膳によるもてなしで雑談し始めた。

「近頃は良い囲碁敵も少なくなってきた、さびしい限りですなア」

「本当に。手前などこの現助を相手に酒を飲むのがもつぱらの楽しみになつてしまつて…」

「そうそう、ところでこの現助とやらが…?」

実はこの井筒屋、面白い人間を肴に酒を飲むのが大好きで、

今日は紀伊国屋、井筒屋の隠居に紹介しようと思つてきたのだつた。

「左様で」

「そうかえそうかえ。現助さんとやら、この紀伊国屋さんが言うには、あんたたいした酒飲みだと言う話じゃないか」

それまで、のんきに座敷の中を見まわしていた現助は、急に自分に話し掛けられて、うろたえてしまった。

「い、いや、トンでもねエ」

どもりながら現助は否定したが、すでに紀伊国屋の旦那も井筒屋の隠居も耳を貸さない。

「いやいや、この現助、たいしたどころでは有りませんよ。鱈ウツバミの様に威勢の良い呑みっぷりで…」

「だ、だんな、おいら、こ・困るだよ」

調子に乗る紀伊国屋の主人の袖を後ろから引つ張つたが、当人は全く気づかない。

「そりやもう、軽く一升呑んでけろつとしてるんだから、驚きですよ」

「それはいい。実は、ね。紀伊国屋さん面白いものがあるのだよ」

井筒屋の隠居は、手を打つて奥付きの女中を呼ぶと、何やら指図をした。

そして、女中が出ていったかと思うと、大きな風呂敷包み

【由来・成立】

原話の小咄は安政三年版『落噺笑種時』おとしばなしわらいのたねときにある「上酒」で、中国の『笑府』の「好飲」を翻訳したもの。

人情噺「雪の瀬川」（松葉屋瀬川）が「橋場の雪」（別題「夢の瀬川」として落し噺化され、それを初代三遊亭円遊が古くからあった小咄を付け加えて現行のサゲに直し、「隅田の夕立」「夢の後家」の二通りに改作したと言われています。

小さんのネタ「橋場の雪」ではサゲが、勝手に夢の中へ出演させられ、寒い雪の中を舟を漕いで、旦那を川の対岸へ渡す大役をさせられた挙句、現実世界で旦那の浮気の手助けをしたと父親から怒られて頭を叩かれた小僧が、旦那の肩たたきまでさせられている途中で居眠りをはじめ、女中が「舟を漕いでいる」と言うところで終わっています。

円遊の「隅田の夕立」では、夢で小僧と一緒に一生懸命舟を漕いでいたと言う話をした旦那に、奥さんが「舟を漕ぐ（うたた寝）どころか、大酩だど笑われるところで終わります。

また、どちらも過去の速記によれば、導入部に旦那が外に女を囲っている、と言ううわさ話や、それを裏付けるように替間がこっそり尋ねて来たりなどするくだりが会ったようですが、現在は削られているようです。

今回のサゲである「冷やでも良いから飲めば良かった」と言う部分は、安永五年（一七七六）『夕涼新話集』の「夢の有合」

に見られます。

【ウンチク】

お酒と言えば最近では冷、爛、常温と飲み方にもおすすめがある日本酒が増えました。

お爛の歴史は平安時代に遡るようですが、庶民も爛酒を飲むようになったのは江戸中期からだとか。その頃には冬でも夏でも爛酒を飲んでいたと言われています。

古くは爛鍋と呼ばれる銅製の鍋を火にかけて爛をして、銚子に移して出していたようです。

江戸のころになると火鉢と一緒に使う爛用の箱、爛銅壺が出てきます。これは火鉢の灰の中に埋めておき、火鉢の熱を使って、箱の中に入れた水を温め、そこへ爛徳利などを入れて爛をつけるものです。もともと古くなると、チロリ（上方ではたんぼ）など直接火鉢や囲炉裏の灰へ埋めて爛をつける容器もありました。台所ですつける場合は鍋に湯を沸かしてその湯に爛徳利やチロリを入れたり、竈そのものに爛をつける箱が据えつけてありました。

どちらにしても、炭から火を起こしていた時代、湯を沸かすのも火に当たるのも時間の掛かるものでした。そうなれば、話のように冷やでも良いから、と言う時もあったことでしょう。

● 崇徳院

「旦那様、出入りの熊が参りました」

「ああ、こつちに通しとくれ」

奥付きの女中にそう言うと、恰幅の良い旦那は大福帳を置いて大きな溜息をついた。

「全く困ったものだ…」

「何が困ったもんなんですか？」

旦那が驚いて目を上げると、熊が座敷の前で控えていた。

「ああ、熊かエ。いやよく来てくれたね。さ、こつちへお入り」

「旦那のお呼びとあれば…。では、失礼をして…」

熊がにじり入った。

「さ、もつとこつちへお寄り」

「へ、そうですか」

旦那と熊は、膝を突き合わせるように向き合った。

「熊や、お前そんなに近くに来てどうするんだエ」

「旦那が寄れって言ったんじゃアありやせんか」

「嫌なことをいうね。寄るにも限度があるだろう。ともかく

もう少し離れておくれ。話辛くていけない」

「そうですかエ？」

熊が少しさがると、旦那はまた一つ溜息をついた。

「で、どうなすつたつて言うんです？」

「それがねえ。実は…」

旦那はまた大きく溜息をつく、仔細を話し始めた。

大事な一人息子が、ここ最近寝付いてしまい、飯も喉を通らず日に日に痩せ細っていく。医者に見せた所、何か思い煩う事があるのが原因じゃないかと言う。それが何とかならぬ限りは、どんな薬を与えた所で無駄だと言うのだ。

旦那も、母親も宥めたりすかしたりして何とか聞き出そうとしたが、頑として口を開かない。やつと、出入りの熊になら話しても良い、そう折れた。

「と言う事だから、話を聞いて来ておくれ」

そう言われて、熊は息子が寝ている座敷へと通された。

「おや、熊かえ」

「へへ、どうも。若旦那お加減は如何で…？」

「ああ、もう永くないような気がするよ」

若旦那は、やせ衰え、土気色の顔をして今にも消え入りそうな声で言う。

「そんな情けないことを言っちゃアいけませんよ。そんなことになつたら旦那だつて死んじまいますよ。なんでも、この熊になら話しても良いツて事があるそうじゃありませんか」

熊が水を向けると、息子はちよつと頬を染めて、黙ってしまつた。

● 目黒のさんま

秋と言えば我々下々のものは秋刀魚。脂が乗って丸々と太った、背のつやつやと黒い秋刀魚。焼きたては焼けた脂がじゅうじゅうと跳ねて、えも言われぬ芳しき香り。大根おろしを添えて、ちよいと醬油をたらして食します。柚子やかぼすをちよいと垂らせば重畳。更に炊立てのご飯でも熱燗でも。

ですが大名階級に生まれた武士は、形式、前例にがんじがらめにされた窮屈な生活を送っていました。秋刀魚など口にしたこともないのです。こんなにもまい物を食べたことがないなんて、不憫です。ああ、涎が。

「これ、欣弥、欣弥はおらぬか？」

秋晴れのとある日、下屋敷の一角。先日上屋敷から下がってきた殿様のおいでになる座敷からおつとりと主人の声が響く。どんな小さな声でも聞き逃しちや、腹切りは免れない。

素早く対応しなくてはいけないお側用人の気苦労は絶えなかったことでしょう。

「は、これに」

欣弥は、障子の外に控えました。傍に来いと言われるまでは座敷には入らなかったのです。

「うむ、近こう。まこと良い天気であるの」

欣弥は、ちよつと頭を下げると、にじり寄る様にして殿様の座る上座の近くに行きました。

「御意。秋晴れとはこの事かと存じます」

「どうじや、紅葉など愛でたいの」

お大名様は、周りの迷惑も顧みず、突然突拍子もない事を言い出します。ですがお側用人はいくら「をい！」と思っても口には出せないの、前向きに対処します。この日和に、分からはぬ事もあります。あまりの呑気に忘れておりましたが、お殿様も生まれつき窮屈なのです。が、そこは武家のお殿様、思い立ったからと気軽に物見遊山に容易に出掛けられる身分ではないのです。さあ、前向きに、前向きに……。「されば同じ事なれば、武芸鍛錬の為に遠乗りがよろしいかと存じます」

戦国時代じゃないのに武道にも秀でていけなかったの、高位ある方も大変です。しかし、そのようにすることが代々のしきたり、必要のない時代にも武芸に嗜む、これを大変だと思わないのがお殿様とその家来。まあ、方便ではありますが。「遠乗りか。久しくせなんだが……。さていずかたが良いであろうかの？」

「ここより程遠からぬ、目黒の辺りがよろしいかと存じます
が」

● らくだ

おや、表が騒がしいようですね。

「この引札イ見てみねエ。駱駝つてエなア、ご利益はあるは、良く働くは偉いもんじゃアねエか」

おや、両国の駱駝見世物に行つてきた人でしようか。

「引札にヤアどうでも書けらア。図体がデカイわりにはちつとも動かねエは、何ぞ喰つてるだけだは、ものの役にも立ちやアしねエ」

そう、見世物にやつてきた駱駝はそんなに動かなかったの
で、体が大きいそのそした人を『らくだ』と悪口を言うよ
うになったのです。さて、とある長屋にも「らくだ」と呼ば
れる男が居ました。これが確かに図体はでかいけれども、の
そのそしてる訳じゃアありません。むしろ気が短くて、店賃
すらも二十と九つばかり一辺も払わずいけしゃあしやあとし
ているような男でした。大家さんが店賃を催促に行つても、
仕舞には薪を振り回して「ねエもんはねエと言うのがわから
ねエかこの野郎！」と怒鳴り返す始末。ところがこのらくだ、
大の河豚好きで、冬でもないのに時節違いの河豚にあたつて
あつけなく死んでしまいました。

「おい、らくだ。らくだヨウ。なんだ居ねエのか、まだ寝てるか。しょうのねエ野郎だな。おい、らくだ」

普段らくだが兄イと慕う手斧目の半次と言う男がらくだの長屋の腰高障子をがりり、と開けると、らくだは昨晚の河豚にあたつて上がり口で事切れていました。死体を放つて置く訳にもいかず半次は丁度通り掛かった屑屋を呼び入れます。所が普段から金にもならないガラクタを売りつけようとしたり、騙して金を巻き上げられたり散々な目にあわされている屑屋も係わり合いになりたくないと思ふに立ち去ろうとしますが、またこの半次、らくだが慕うだけある。屑屋は散々に脅かされた挙句商売道具をかたに取られて、長屋の月番に香典の催促にと走りされるハメとなつてしまいました。

所が、こんならくだの事。長屋連中も毎度酷い目にあわされて居たものですから、喜びこそすれ、誰も用う気もありません。何しろ、長屋の付き合ひでの弔いに香典すら出した事も無いのですから。それなのに香典の催促に來られても

「自分のほうで死んだんだから香典を集めろと言うの、無理だろう」

と取り付く島もありません。それでも屑屋のほうもハイ、そうですかと戻れば半次がきつと怖い顔で怒鳴りつ

● 首提灯

江戸の夜は暗いもの。提灯を持って月が出ていたってそう細かく見えるわけではありません。ましてや月のない晩などと言ったら、足元をぼんやり照らすのが精一杯の提灯では、行き違う人もすぐそばに来るまで気がつかないほど。

そのため、特に芝辺りは「新刀の試し斬り」だとか「斬りとり強盗」なんて辻斬りが出没していた頃でもありました。

そんなある晩、品川遊郭にでも繰り込もうかと言っているところでしようか、芝の暗い夜道を一人の江戸っ子が歩いていきます。既に相当酒を過ぎたようで、べろんべろんです。見ている間に、あつちへよろり、こつちへふらり。吐く息はお酒の匂いが酷くて、これでは廓に上がつても遊女が嫌がつて振られるのは間違いない、と心配になるほど。それでもご機嫌らしく、うふふふ、と笑ったり、陽気な端唄を三味線の口真似までつけて歌ったり、「%#\$ / + * @ !!」などと、ワケの判らない言葉を叫んだりしています。どうも博打か何かで大もうけでもしたようです。回っていない呂律で「こえからおらい尽遊びらア」と独り言をのたまったところで、はつといきなり我に返って口を嚙みます。どうやら気を大きくさせていた酒精も醒めた模様。

「チヨ、さびしい所へ出ちまったぜ。エエ、芝の山内かエ？ 物騒な噂のあるとこで『金の話』もそそっかしい……」

ぞつと悪寒が背中を走ります。カラ元気も元気の内、と腹に力を入れて、おう、と気合を入れます。声がちやんとでた事に安心した酔っ払い、何でも逆を言えば反対になるというのを思い出します。

「さあ、辻斬り出やがれ。追はぎ出る！ 出たら塩つけて頭からかぶりついてくれらア」

「おい、待て……」

言った途端に声をかけられたので、思わず酔っ払いは飛びあがります。ついでに、ひえい、なんて変な叫び声も上げました。

「……もう出やがったよ。何も頼んだからって、こんなにすぐ出なくてもいいじゃないかエ……」

恐る恐る提灯の灯をかざして顔を見上げると、そこに居たのは背の高い侍。

「おじさん、何か用かい？」

ほつとした途端、酷く驚いた恥ずかしさで口が悪くなりま

す。

「おんめエ、武士に『おじさん』ちゃあなにごとだあ」

「へん。そつちが『おい』だつてから、『おじさん』つて言つたまでだ。で、何の用だエ？」

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)